

オンライン授業に移行した初年次教育前期を終えて—2019 年度と 2020 年度比較—

河村 徳 士 †

1 はじめに

2020 年度、城西大学経済学部では、1 年生向けの初年次教育に対して新しい取り組みを模索していた。高等学校までの教育から大学のそれに移行するための学びのあり方を体系的に伝える試みであった。その企画は、認知的な知覚方法に期待するばかりではなく、学生同士の交流に近い事柄—非認知的な知覚方法とでも呼べるのかもしれない—も初年次教育の一環に含まれると判断するものだったから、次のような内容を練るものとなっていた。すなわち、プレゼンテーション、レポート作成方法などの大学教育一般に必要なと想定できるスキルを共通的に教示する試みに加えて、バスツアーといったレクリエーションに近い活動を想定していたのである。

しかしながら、2020 年度前期は、新型コロナウイルスの流行によって、城西大学も一ヶ月始業を遅らせたうえオンライン授業としたので、これらが具体化することはかなわなかった。フレッシュマンセミナーは従来通り各教員の判断で進めることとなり、基本的には昨年度までの方法を踏襲せざるを得なくなったわけである。それでも、筆者の場合、新しい取り組みを模索した会議の議論を踏まえて臨むことで、少しでも今後の方向性を反映させることを意識できればよいのではないかと考えていた。具体

的には、一年生が大学教育に慣れることを例年以上に意識したということになる。

もともと、教員側にとっては、オンライン授業事態が初めての試みであったから、こうした方法でもって例年の初年次教育における水準を最低限満たすことでさえ困難なものであった。そのため、新しい企画の趣旨を反映させることについて、多くを期待することは難しいものであった。

こうした限界があったものの、意図せざる結果として、オンライン授業の可能性と限界を垣間見ることができた。そこで、本稿では、初年次教育に関する新企画について論じることはやや差し控え、オンライン授業の成果と課題にとりわけ着目して、考えたことや感じたことを論じることとしたい。

2 授業内容

対面授業であった 2019 年度前期のフレッシュマンセミナーは、次のように進めた。はじめの数回で自己紹介や雑談を交えながら交流を促し、その後、輪読を進めるというものであった。輪読の方法は、隅谷三喜男『大学でなにを学ぶか』岩波ジュニア新書、1981 年を教材とし、とりあげる章について、各自で分担をして内容を紹介してもらい、メンバーで議論するものであった。

オンライン授業となった 2020 年度は、上田

紀行編著『新・大学でなにを学ぶか』岩波ジュニア新書、2020年を教材として、同じく輪読を主とした。2019年度と異なることがあるとすれば、雑談を交えた交流に多くの時間を割いたことであった。

2019年度以前の授業記録、すなわち出席状況等が残っていないので、やや比較対象が限定されるが、2019年度と2020年度とを比べながらオンライン授業のあり様を考えていくこととしたい。

3 出席状況比較

第一に、出席について検討しておこう。筆者は初回の開講時に、原則すべて出席すること、

表1 フレッシュマンセミナー（河村）出席状況2019年度

20名、14回				分類	
学生	出席回数	遅刻	欠席	出席回数	人数
A	10	2	2	14	5
B	12	0	2	13	4
C	14	0	0	12	8
D	11	0	3	11	2
E	13	0	1	10	1
F	14	0	0	計	20
G	14	0	0	遅刻回数	人数
H	12	0	2	2	1
I	12	0	2	計	1
J	12	0	2	欠席回数	人数
K	12	0	2	3	2
L	14	0	0	2	9
M	13	0	1	1	4
N	12	0	2	計	15
O	13	0	1		
P	12	0	2		
Q	13	0	1		
R	12	0	2		
S	14	0	0		
T	11	0	3		

やむを得ない事情があればメールで連絡のうえ欠席することがあっても構わない、ただし、年間を通じて3分の1を超えた欠席であれば、どのような理由があっても単位認定できない

と伝えていた。これは着任時の2018年度から変わらないことである。

そのことを前提に検討を加えれば、次のとおりであった。表1によれば、2019年度のフレッシュマンセミナーは、金曜2限開講で、20名が履修登録し前期は14回の開講であった。学生別の出席状況は一覧のとおりであるが、これを分類した右欄をみれば、すべて出席した学生は5名に過ぎず、13回が4名、12回が8名で最も多く、11回2名、10回1名となっていた。ただし、10回しか出席しなかった学生Aは、うち2回が遅刻なので12回は顔を出していた。そのため、出席回数欄にあるように、最多欠席は3回で2名にとどまった。そうした意味では、20名中18名は、14回中12回は顔を合わせていたことになる。反面で、2回の欠席は9名を数えたように、これぐらいの休みであれば免罪されると判断されてしまったということでもあるだろう。

次に、オンライン授業であった2020年度の様子を、表2を用いて検討しておこう。

表2 フレッシュマンセミナー（河村）出席状況2020年度

18名、13回				分類	
学生	出席回数	遅刻	欠席	出席	人数
A	14	0	0	14	14
B	14	0	0	13	3
C	13	1	0	12	0
D	14	0	0	11	1
E	14	0	0	10	0
F	14	0	0	計	18
G	14	0	0	遅刻回数	人数
H	14	0	0	3	1
I	14	0	0	2	0
J	14	0	0	1	3
K	14	0	0	計	4
L	14	0	0	欠席回数	人数
M	14	0	0	0	18
N	11	3	0	計	18
O	13	1	0		
P	14	0	0		
Q	13	1	0		
R	14	0	0		

水曜2限開講で、履修登録者数は18名であ

って、始業が遅れたこともあり、開講数は13回であった。分類した右欄をみれば、すべて出席した学生は18名中14名であって、13回が3名、11回が1名であった。もっとも、欠席者はおらず、遅刻者があったので正式な出席とならなかった事態が反映された結果であった。遅刻は、3回が1名、1回が3名であった。判明する遅刻の理由は次のとおりであった。学生Cは、前記も終わりに近づいた12回目であったが、パソコンの調子が悪かったためであり、学生Nは寝坊等で3回遅刻し、学生Qは、初回時にオンライン接続ができずに授業が終わるころに参加したためであった。オンライン授業に不慣れなことが影響したこともあった様子がうかがえる。

両年度を比較すると次の点が指摘できる。一つ目に、2019年度と比較して明らかに異なることは、欠席者が皆無だったことである。自宅で授業を受けることができるようになり、登校の時間や手間が省略されたことも要因であろう。また先輩や友人ができることで、ある種のさばる方法が伝達されることがなかったためかもしれない。

二つ目に、それでも、寝坊等で遅刻する学生を数えたことは、高等学校までの出席が規範化された生徒としての立場から自ら学ぶ姿勢（学生）への移行が円滑に行われなかったためかもしれない。もっとも、反対の解釈も可能である。すなわち、オンライン授業であっても自ら学ぶ姿勢が大学という枠組みでは飽き足らずに、それを超えてしまう学生を生み出す可能性があると考えられることである。例えば、コロナ禍以前の学生生活であれば、サークル活動等に精を出しすぎたり、アルバイトにエネルギーを注ぎすぎたりといったことである。もっとも、こうした逸脱が行き過ぎると、単位認定が困難になるので、我々としてはほどほどを求めざるを

得ないのであるが、オンライン授業であっても、ある種のこうした大学生らしさを生み出すことがあったのかもしれない。

4 対面とオンラインの授業比較

第二に、筆者の主観的な解釈に基づくものであるが、授業の様子を比較してみることにしたい。

はじめに、2019年度の対面授業に関することから考えて見よう。当然のことながら学生も教員も顔を合わせながら進めることができた。自己紹介は、姿や表情の印象と名前を関連づけながら、そのうえ趣味や出身地などの情報も紐づけながら進めることができ、筆者はメモをとり記述記録を行いながらも、参加メンバーを映像として記憶することが可能であった。学生も同様であったらう。

輪読に移行してからも、もちろん同じであった。学生には次のことを求めた。すなわち、担当箇所を報告する際は、事前に資料を作成し紙媒体で配布して内容の紹介と論点提示をすることであり、報告担当以外の学生に対しては、該当箇所を事前に読み、自分が考えたことや報告者との共通的な関心や相違性に気を配りながら発言し、少しでも議論になるように意識することであった。発言の回数は、教員の意図通りに進まないことも稀ではなかったものの、おおむね学生はトライしてくれた。

こうした報告や議論の過程において対面授業ならではの様相は次のようなものだろう。例えば、報告者の表情を観察しながら、言わば空気を読んだ発言の有無や内容の修正はよくあることだったと考えられるうえ、報告の様子や発言の仕方から他者に対する様々な理解が深まることもあったであろう。また、教員が学生の様子をみて発言を促すこともあったうえ、反

面で、集中力を欠いた学生に対しては口頭で注意することも可能であった。言わば、これまでの通常のゼミナール形式が可能だったわけである。

これに対して、2020年度のオンライン授業では、次のようであった。マイクロソフトチームズを用いて音声のみならず、カメラを搭載した機器を利用すれば、映像を介した参加も機能的には可能であった。もっとも、履修学生の全員がそのような条件に与ったわけではなかった。

自己紹介の際には、カメラを搭載した機器を利用している学生にはなるべく映像を介した参加を促した。少なくとも画面を介した印象付けは限定的には可能であった。チャットも併用しながら相互に興味の情報を交換するなどして交流を深めてもらった。

輪読に移行してからは紙媒体で報告資料を配布することは不可能なので、事前に作成したレジュメを、教員宛にメールで添付ファイルを送り、画面共有機能を利用して報告してもらった。ワードファイルに慣れていない、あるいはファイルをメールで添付する機能を利用したことがない学生は、実際に報告するまでに時間がかかるケースもあったが、おおむね対応できた者が多かった。議論の祭は、音声通話のみを利用しカメラ機能は基本的にはオフにしていたものの、臆することなく自発的に発言する学生が数名いたうえ、そうした意見に即して応答的に意見を述べた者もいた。なかなか発言しない学生に対しては、表情等の様子がうかがえないものの、教員からランダムに発言を促したところ、ほとんどの者が対応してくれた。少なくとも席を外すことは少なかったものと推測される。

このように限界はあったものの、自己紹介を介した簡単な交流、課題報告、議論は不可能ではなかったと考えられる。考え方や意見が一致

した場合などは、離れていても何らかの意識の共有ができたであろう。

しかし、反面で、表情や雰囲気を読み取ることができないことは、人的な交流や学習面でやはり課題も残した。笑顔や考えているときの表情などは、発言以上に物事を伝えることが、おそらくあるであろう。そうした意義を見出すことは、オンライン授業ではなかなか難しいものであった。カメラ機能を活用することは、人数が多ければ通信障害を来しかねないうえ、各自の機器の負担を強めてしまうので、推奨に躊躇した。前期の終わりに、達成したこと、やり残したこと、感想などを一人一人に求めたが、一定数の学生は素直にキャンパスで授業を受けてみたいと感じていたようであった。

5 おわりに

以上のように、オンライン授業の可能性は、出席の良好化、最低限のゼミナール形式の達成などに求めることができる。また、意外と教員も学生もオンラインゼミに早く慣れることができたことは発見であった。もっとも、限界は、対面という人的交流が欠如したままであると、空間あるいは雰囲気を介した、ある種の前向きな緊張感を伴う議論の可能性が奪われてしまうこと、同様に表情やしぐさをも踏まえた交流、ひいては友人関係の形成が困難になることに認めることができそうである。

2020年8月から9月にかけての感染状況を踏まえ、後期もオンライン授業としたが、もう少し人的な交流が深められるように工夫できることを模索したいと考えている。